

検疫上注目される病害虫の解説

オウトウショウジョウバエ

学名：*Drosophila suzukii*

英名：spotted wing drosophila

本種は日本を含む東アジア原産であり、従来からモモやイチゴ等の生果実の害虫として知られていたが、1980 年頃ハワイに、2008 年にカリフォルニア、2009 年にはイタリアへ侵入し、現在まで北米及びヨーロッパのほぼ全域、南米の一部で発生が確認され、これらの地域で大きな被害をもたらしている。2014 年 12 月に輸出が可能となったオーストラリア向け日本産ブドウ生果実では、本種未発生国である同国は我が国に対し、その検疫措置として①果実の袋かけ②生産園地管理③生産園地における検査④収穫後の選果及び選果こん包施設におけるモニタリング⑤輸出検査等の組合せを要求している。

分布地域：日本、朝鮮半島、極東ロシア、台湾、中国、タイ、ミャンマー、インド、パキスタン、ハワイ、ヨーロッパ、カナダ、米国、メキシコ、ブラジル南部

寄主植物：サクランボ（オウトウ）などの *Prunus* 属、ブルーベリー、ラズベリー、ブラックベリー、イチゴ、カキ、イチジク、ブドウ、リンゴ、ナシ等

形態：成虫は体長約 3mm。体色は暗黄褐色で、雄は翅端付近の前縁に黒斑を持つ（図）。雌は翅の黒斑を欠き、産卵管の下縁には鋸歯状突起が並ぶ。卵は長径約 0.5mm で乳白色で 1 対の糸状突起を持つ。成熟した幼虫は体長約 6mm で白色のウジ状。蛹は体長約 4mm で赤褐色、前端 1 対の突起は先端が多数の棘状に分かれる。

生態：温暖な気候を好み、成虫は 10℃以上で活動する。年間最大 15 回発生し、産卵から羽化までの期間は通常 1～2 週間である。雌は羽化後 2～3 日で交尾し、1 果当たり 1～15 個の卵を生み付ける。1 週間前後で成熟した幼虫は通常果実内で蛹化するが、1 果当たりの産卵数が多い場合は、土中で蛹化することもある。蛹期間は 4 日前後である。越冬態は成虫で、枯葉や小石の間で越冬する。成虫は糖類やアルコール飲料に誘引されることから、糖蜜、食用酢及びブドウ酒の混合液やオウトウの果汁がトラップ調査等に使用されている。

被害：オウトウやブルーベリー等の熟果に穴を開けて産卵し、ふ化した幼虫が果実内を食害する。オウトウでは幼果への食害はなく果実の着色が始まってから食害が生じる。加害部は数日で変色し、その後、カビや細菌の 2 次感染によりさらなる品質低下を招くこともある。果実の熟期に合わせて寄主植物を替えて産卵し、オウトウの収穫後はイチゴ、グミ、クワ、ブルーベリー、モモ、ブドウ等のいずれも熟果に産卵する。落下した果実や傷ついた果実に産卵することもある。なお、国内では登録農薬により防除が行われているため、顕著な被害発生は認められていない。

防除：化学的防除と耕種的防除の組み合わせが一般的である。オウトウの栽培ではピレスロイド系及びネオニコチノイド系の農薬が主に使用されている。耕種的防除法としては、早生品種の収穫 1 か月前 0.98mm 以下の防虫網で園地を被覆することで被害を低減できる。

参考文献

EPPO. *Drosophila suzukii* (Diptera: Drosophilidae). http://www.eppo.int/QUARANTINE/Alert_List/insects/drosophila_suzukii.htm. (accessed 4-ix-2015).

川瀬信三・内野憲・家壽多正樹・本居聡子 (2008) ブルーベリーを加害するオウトウショウジョウバエの網による防除. 千葉農総研研報 7: 9-15.

瀬戸真宣・金城寛俊・仲井まどか (2015) オウトウショウジョウバエの日本と欧米における生態と防除の研究事例. 植物防疫 69: 77-82.

梅谷献二・岡田利承編 (2003) 日本農業害虫大辞典、全国農村教育協会 東京：1203pp.

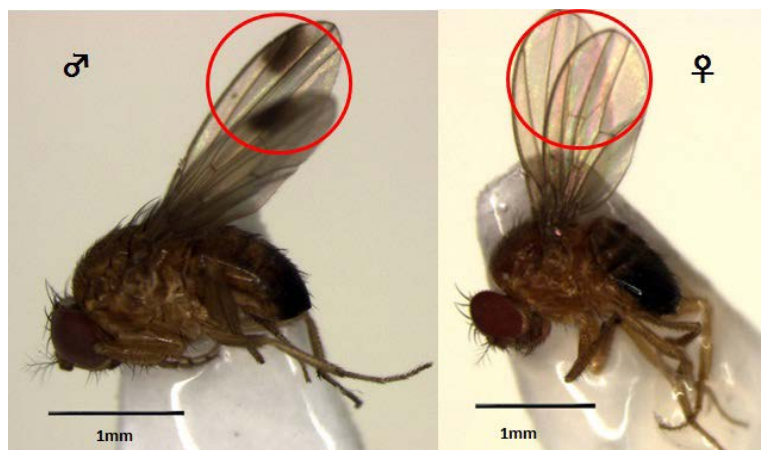


図 成虫